
魔法少女リリカルなのは～イレギュラーな転生者～

オウラン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは〜イレギュラーな転生者〜

【Nコード】

N2837N

【作者名】

オウラン

【あらすじ】

友人に巻き込まれて転生トラックに轢かれた佐伯光貴。共に轢かれた友人、真宮龍斗と一緒に『魔法少女リリカルなのは』の世界に介入する。

しかしその世界には、二人以外にも数名の転生者が……
神様から最強チート能力を授かった龍斗とある能力を授かった光貴はどのようにこの世界に介入するのか？……

第1話『巻き込まれたイレギュラー』（前書き）

どうも、みなさん！

他の小説を投稿しないといけないのに気分転換に書き始めたら一話が出来てしまったので、投稿することにしました。

これからは、2つの小説を書いたから更新していく予定です。

それと、この話は転生者による原作介入によりアニメはあつて無いようなものになる可能性があるのですが、苦手な方はご注意ください（出来るだけ、アニメの流れは大切にしたいです）

キャラ崩壊、原作ブレイクは普通に起こると思います。

以上のことが大丈夫な方は読んで行ってくれると嬉しいですよ！！

第1話『巻き込まれたイレギュラー』

「あゝあ、やっぱり二次元は最高だよな」

俺の隣で、残念な事を口走ってるのは、俺の友人、真宮龍斗。
成績優秀、運動神経抜群、おまけにイケメンと言った完璧超人な
んだけど……

さっきの言葉から察する通り、こいつは生粋のオタクだ。

「……龍斗。いつもそればかりだな」

「うるさい！！ 二次元は俺を裏切ったりしないんだよ！！」

今の言葉も最近では龍斗の口癖になって来ている。

こいつは、女子と付き合う事になってもこの趣味のせいかすぐに
別れてしまう。

いつもいっても、女子の方から告白して来て数日の内に捨てられて
しまうのだ。

……まあ、捨てられるのにも理由はあるんだけど。

「ちくしょ〜！ なんだよ！ そんなにギャルゲが悪いのかよ！

！」

こんな事を普通に言ってる龍斗だが……

……それは、ギャルゲが悪いんじゃない、それを平気で彼女に勧
めるおまえが悪いだろ。

ぶっちゃけ、自業自得だ……

そりゃあ、初めてのデートでいきなりア メイトに連れて行って、

激突した時の激痛と吹き飛ばされていく感覚の中、段々と俺の意識は落ちていく……

そして、俺が目覚めた時には……

「……どこだ、ここ？」

どこかわからない、真っ白な空間だった。

……落ちつけ俺、まずはどうしてこんな所に居るのか考える。

……確か、龍斗と帰ってる途中、凄いスピードで突っ込んできたトラックが激突して来て、気が付いたらこんな場所に居たと……

……全くわかんねえ。

なんでトラックと激突してこんな場所に来るんだよ！！

……まさか、ここは天国？

……って！ それよりも龍斗もここに居るのか！？

俺は龍斗が気になり辺りを見渡したら……

「……どうせ、俺なんて」

普通に龍斗が居た。

……てか、あいつ。まだ落ち込んだのか！？

「おい！ 龍斗いい加減」

「……どうせ、どうせ」

……ご、こいつは……！！

そろそろ、本気でイラついた俺は龍斗の襟を思いっきり掴んで……

「目え覚ませやこらああああああ！！！」

「ぶふおっ!!」

思いつきり顔を殴り飛ばしてやった。

……ちよつと、すつきり!

「な、なにすんだよ!……って! ここはどこだ!？」

正気に戻った龍とは辺りの景色が帰り道とは全く違う事に焦っているのだらう。

……この様子なら、トラックに轢かれた事も憶えてないな。

「知らん! いきなりトラックと激突したと思ったら、いつの間にかここに居た」

「な、なに!!! トラックだと!!」

俺の話を聞いた龍斗は驚いている。

そりゃあ、そうだらう。実際意識がちゃんとしてた俺だってなにがなにや「キタ
!!」

……どうしたんだ、いきなり叫んだりして?

「お、おい龍斗。一体どうしたんだ!？」

「わかんねえのか!! トラックに轢かれて変な空間と言ったら、転生イベントに決まってるだらうが!!」

……いや、そんなこと言われても。

転生イベントって、よく龍斗が言ってた二次小説とかによくあることだったか?……

「……おまえな、現実にそんな事があるわk」「そやつが言ってるのは本当じゃよ」「……今度はなんだよ!？」

突然声が聞こえた方を向くと、老人が宙に浮いてそこに立っていた。

「神様キタ

!!」

「いかにも!! わしが神様じゃ!!」

龍斗はまたなにか叫んでるし、この老人も老人で自分は神だとか訳のわからない事を……

……大丈夫か、こいつ等？

「なあなあ! 神様が来たってことは、俺達は転生できるんだよな!？」

「ほおほおほお、その通りじゃ。わしのミスでお主等を殺してしまつてな……好きな世界に転生させてやるから、赦してくれんかのぉ?」

……ちよつとしたミスで殺しただと!! それで他の世界に転生させてやるから赦せと……ふざk「いいぜ!」「……おい!!」

「ほおほおほお、そうかそうか。それじゃあ 「ちよつと、待て!」 なんじゃ?」

「……龍斗! なに勝手に決めてんだ!？」

「だって！　こんなチャンスないぜ！！」

……こんな物のなにがチャンスだ！！

それにあの神様とか言ったジジイ……なにか胡散臭い感じがする

……

……このジジイ。殺したのはミスとか言ってたが、わざとじゃないだろうな？

「どうしたのじゃ？　お主は不満なのか？」

「ああ、不満だ！　特に、ミスで殺したからって他の世界に送ってやるから赦せて言う考えが一番不満だ！！」

「……しかし、もう一度、死んでしまった者はもう元の世界には戻れんのじゃ……じゃから、わしに出来る償いは他の世界に転生させてやる事しかできんのじゃ」

「……ちっ！！」

確かにもう死んでしまったのだし、俺にはもうどうする事も出来ない……

不本意だが、流れに身を任せるしかないか……

「……龍斗。俺はこういうの詳しくないから頼むぞ？」

「あ、ああ。まかすとけ！」

「……いいのか、お主？」

「早くしろ！　おまえの顔見ると腹が立つ！！」

「ふ、ふむ……では、まずお主等を送る世界じゃがどこがいい？
マンガやアニメの世界にも自由に送ってやるぞ……！」

俺はあまりマンガにもアニメにも興味はない。

見たのは、龍斗に無理矢理見させられた物ぐらいだ……

「ん……じゃあ『魔法少女リリカルなのは』の世界で……！」

……どこかで聞いた事ある名前だな？

……ああ、確かこの前、龍斗に見させられたアニメがそんなタイトルだったような気が。

一樣、三部作全部見たし……なかなか面白かった記憶はあるな。

……龍斗も一樣、俺の知ってる世界を選んだのだろう。

「むつ……『リリカルなのは』か？……」

なんだ、あの反応？

「おい、なにかあるのか？」

「い、嫌。只、あの世界は他の世界と比べて人気での……お主等以外にも何人かも送っておるんじゃ……」

「えっ……！俺達以外にも転生者が居るのか……！」

「ああ、何人かは忘れたのだが数人。その世界に送った記憶があるの……」

……俺達以外に数人送られている？

嫌、あのジジイの口ぶりだと他の世界にも送ってるらしいし、もつと居るのか……

……やっぱり、このジジイ胡散臭いな。

「……どうする、光貴？」

「別におまえの好きなようにしていいぞ」

「わかった……じゃあ『魔法少女リリカルなのは』の世界で頼む
！！」

「了解じゃ……それじゃあ、お主等にわしからもう一つお詫びとして【リンカーネータ転生技能】をお主等に授けよう……なんでも好きな能力を3つまで授ける。さあ、言ってみよ」

……【リンカーネータ転生技能】？ そんな物が必要なのか？

……確かにあのアニメ。戦闘場面はあったが、そんなの介入しなければ問題ないだろ？

「光貴！ どうする！！ もう決めたのか！！」

「……いや、いきなりそんなこと言われても？……先に決めていいぞ」

「そうか！！」

龍斗は凄いご機嫌でジジイに3つの能力を頼んでいた。

……そんなに嬉しいものなのか？

……あのジジイの事だ、他の奴にも同じような事を言ったのだろ
う。

「ああ、俺はその能力一つで十分だ」

そう言っつて、俺はまだ浮かれている龍斗の所に戻った。

「おっ！ 光貴！ 一体どんな能力にしたんだ！？」

「……後で教えてやるから、おまえは早くあのジジイと話を付けて来い！」

「ああ、わかった！」

龍斗はジジイの所に残りの事を決める為、話に行った。

数分後。話が終わったらしく、俺達はようやく転生する事になった。

……ようやく、あのジジイから離れれるのか。

「それじゃあ、二人ともいいな！」

「ああ！ いいぜ！」

「……早くしろ」

「ふむ……では！」

ジジイが手に持っている杖を振りあげた瞬間。
俺と龍斗は光に包まれた。

一人になつた世界で神は先程の少年の事を思い出していた。

「……まさか、殆どの者が浮かれて自分勝手な能力を付けるのに、あんなスキルを望む奴が居るとはのお」

神は少年に授けたスキルの事を思い出す。

あんなスキル、自分にはなんの作用もないスキル。

二次小説などのオリ主などに憧れている奴なら望む筈のないスキルだが……

「……まあ、よいか。あの少年は最初から他の者とは違いわしを疑つておつたしの」

この神の言葉は間違っていない。
本来ならあの転生トラックに轢かれるのは真宮龍斗一人だけだった。

あの少年はイレギュラーの中でもイレギュラーなのだ。
転生トラックとは本来、二次小説などに憧れ自分も転生したいと考える者を轢く力。

殺したのはミスではなく、わざと。

転生すると言う望みと、神の娯楽が合わさっている物なのだ。

「……佐伯光貴……久しぶりに面白い物が見れるかのお？」

神は自分の意志で送った転生者より、イレギュラーで転生した男を一番楽しみにしていた。

第1話『巻き込まれたイレギュラー』（後書き）

第1話いかがでしたか？

まだ、アニメの世界に行くのは2話からになります。

今回の話では、光貴の能力も龍斗の能力も出てませんが、少しずつ出していきたいと思います。

ついでに、光貴の顔は龍斗には及ばないですがイケメンです。

だけど、目つきが悪いのでそのせいで、それ、男子には絡まれたり、女子は近づい来なかったり、色々苦労してます。

こんな小説ですが、続きも書いたら読んでくださると嬉しいです

！！

それじゃあ、次回もよろしく願いします！！

第2話『転生するイレギュラー』（前書き）

どうも、みなさん

第2話です。

今回で二人はアニメの舞台。海鳴市転生します。

まあ、本編はまだ始まらないけど……

それでは、どうぞ!!

第2話『転生するイレギュラー』

気が付いたら、俺は神社の敷地内に立っていた。

……ここが、アニメの世界か？

思ったより、元の世界と変わらないな……

「光貴！ 本当にアニメで見た風景そのままだ！ 俺達本当にアニメの世界にやってきたんだな！！」

「……」

「ん、どうしたんだ光貴？」

……誰だこのガキ？

俺に話しかけてきたのは龍斗の筈だ。

言ってる事から考えてこいつが龍斗の筈なんだけど……

「……龍斗なのか？」

「はあ？ 見たらわかるだろ？」

「……なんで、ガキになってるんだよ？」

「えっ……うおっ！！ ホントだ！ なんで!？」

こいつ気がついてなかったのか？

「まさかこれは……」

「なにか心当たりがあるのか？」

「ああ、こういう転生物にはよくある事だな、転生者は子供の身体になってしまふ事がよくあるんだ」

「だけど、俺は特に変わったところなんてないぞ？」

俺は自分の姿を確認する。

自分の身体から身に着けていた物まで変わった所はない。
トラックに轢かれた時の格好のままだ。

「それは俺にもよくわかんねえ。神様と話したときはそこまで話さなかつたし……」

「まあ、原因なんて考えても無駄だろうな……それよりもこれからどうするかだ」

「決まってるだろ、光貴！ もちろん、原作介入だ！！」

「……馬鹿かお前？ それよりも先に決める事があるだろ！？」

「はあ？ なんだよ？」

「生活手段だ！」

「……あ！！」

アニメの世界だからって、舞い上がり過ぎなんだよこいつは……
幾ら、元の世界ではアニメでも今の俺達にとってはここが現実な

んだ。

今の俺達に戸籍なんて物は無い。

さて、どうしたもんか……

「……俺が読んだ転生物だと主人公の家に住ませて貰ったりしてたぞ？」

「そんなのをあてにするな馬鹿！ いつまでも舞い上がってんじやねえぞ！ 冷静に考えろよ、ここはもうアニメの世界じゃなくて、俺達が住む現実なんだ！ 常識的に考えろ！！」

「ッ！！……悪い、そうだな」

ようやく、いつもの調子に戻る龍斗。

舞い上がるのは勝手だが、おまえはそこまで馬鹿じゃないだろ……

「それに考えてみる、この転生したのは俺達だけじゃないんだぞ？」

「そうだな。他の奴等の俺と同じ事を考えてるだろうし……ってことは、原作キャラの家は無理か……」

「ああ。幸い俺は元の姿のままだからな、履歴書の要らないバイトを探せば金はどうにかなるけど……」

「……俺はこの姿じゃ無理だな」

龍斗は自分の姿を確認しながら悔しそうに言う。

どうする？ さすがに2人分稼ぐのは無理だ。

もしもの時は……

「お、おい。光貴、なんだその目は？」

「いや、もしもの時は孤児院にでも投げ捨てればどうにかなるかと……」

「……じ、冗談だよな？」

「マジだけど？」

「た、頼むから見捨てないで！！」

「だから、もしもの時はって言っただろ！！」

今、この世界で信頼できるのは龍斗だけだからな、こいつが居なくなるのと色々辛い。

だけど、この選択肢も考えとかないとな……

「ああ、悪い……それで、どうするんだ？」

「まずは街を見て回るぞ。こんな所にいつまで居ても意味が無いからな……道わかるか？」

「……あまり、アニメの中でもあまり描写は無かったし」

「それじゃあ、適当に歩くとするか」

「わかった！」

そうして、俺達はまず街を見て回るのだった。

なんとか街に出る事が出来た俺達は街の中を色々と見て回っていた。

街を歩いているとある事がわかった。

「それにしても、金が元の世界と一緒になのは助かったな！」

「ああ、さすがに製造番号がある札は使えないけど、小銭なら使えるからな」

なんと、前の世界と金が一緒だったのだ。

小銭ならばれずに使えるから、財布の中身から考えて今日の飯は大丈夫だろう。

札が使えたら、もっと大丈夫なんだけどな……

「それじゃあ次は……光貴！ あの喫茶店行こうぜ！！」

「ああ？……喫茶翠屋？ なにかあるのか？」

「ああ、主人公の親が経営してる喫茶店だ！」

小銭はまだあるし、喫茶店で休むぐらいなら大丈夫か……それに、アニメにも出てる店なら他の転生者もいるかもしれないし……行ってみるか。

「そうだな。少し休憩するか」

「よっしゃ！ それじゃあ、行こうぜ！！」

俺達は二人で、喫茶店の中に入る事にした。

「いらっしゃいませ〜。二名様ですか？」

「はい！」

「それじゃあ、こちらにどうぞ」

俺達は店員に言われた席に着く。

「さてと、なににしようかな！」

「あまり高いのは頼むなよ」

「わかってるよ!……よし、決めた! 店員さん！」

「はい！」

「シュークリームとオレンジジュースをお願いします！」

「ホットコーヒー」

「かしこまりました。少々お待ちください」

注文を受けた店員が戻って行く。

「楽しみだな〜！」

「そんなに美味しいのか？」

「さあ？ アニメでは自慢の品みたいだったし！ 美味しいんだろ
！！」

俺も頼めばよかったな？

シュークリームは好きな方だし……

まあ、美味そうだったらまた来ればいいか……

「お待ちせしました。シュークリームにオレンジジュース。ホツ
トコーヒーになります」

少し経って、運ばれてきたコーヒーを飲む。

「……美味しい」

コーヒーの美味さについて口から声が漏れる。
さすがは喫茶店。

いつも飲んでる缶コーヒーとは全然違うな……
すぐに全部飲んでしまった。

「シュークリーム。うめえ〜！！」

龍斗が口の周りを凄い汚しながらシュークリームを食べている。

……凄い汚い、幾ら子供の姿だからって精神年齢は俺と同じなのに

「……龍斗もう少し、綺麗に食べえ」

「ん、ああ悪い悪い。あまりに美味かったもんでな！ おまえの
コーヒーはどうだ？」

「ああ、美味しい」

「どうやら、気に入ってくれたみたいだね？」

いつの間にかこの店の店員らしき人が俺達の机の傍に立っていた。……誰だ？ 客に話しかけてくるなんて随分とフレンドリーな喫茶店だな？

「この店の方ですか？」

「そうだよ。君達が随分と気に入ってくれたみたいだからね……
コーヒーのおかわりはどうかな？」

「あ！ いただきます！」

俺はカップにおかわりのコーヒーを注いで貰う。

「君達は兄弟なのかい？」

「いえ、いとこです。親が忙しかったので、僕が街まで遊びに連れてきたんです」

「そうかい。いや、僕にもこの子と同じぐらいの子が二人いてね」
そう言いながら、龍斗の方を向く。

「二人？ 双子ですか？」

「いや、一人は僕達のホントの子だけど、一人は少し前から一緒に住んでるんだ」

「そうなんですか」

俺が龍斗の方を向くと、龍斗も俺の方を見ている。

「どうやら、少し前から一緒に住んでる子供って言うのが転生者みたいだな。」

「おっと！ それじゃあ、僕はそろそろ戻らないと、気に入ってくれたんなら、また来てくれると嬉しいな」

「はい！ ぜひ！」

適当に挨拶を済ませて、店員さんは戻って行った。

「……光貴」

「転生者だろ？」

「ああ、どうやら一人は原作キャラに接触してるみたいだな」

「みたいだな」

「……どうする？」

「なにがだ？」

「だから、原作介入だよ！」

「……どうやら、龍斗は原作介入をする気みたいだ。」

俺ははつきり言って興味が無い。

やるなら勝手にやっつけてくれって感じだ。

「やりたいなら、勝手にやればいいだろ？」

「手伝ってくれないのか？」

「いや、おまえがやりたいなら手伝うぞ。てか、俺が居ないとやり過ぎそうだしな」

こいつはまだここがアニメの世界だと思ってるからな。原作介入とか言って、やり過ぎるのを止めないと。

「ああ、頼りにしてるぞ！」

「ま、手伝うつても俺は何もできないけどな、あのジジイから貰った能力もそんな物じゃないしな」

「いや、おまえが手伝ってくれるんなら、なんだってできるさ！」

この自信はどこから出てくるんだろ？

まあ、手伝えなくてもこいつのストッパーぐらいにはなれるだろ。

「よっしゃ！ それじゃあ、金を払って作戦会議だ！ 行くぞ、光貴！！」

龍斗が喫茶店を飛び出して行ったので、しょうがなく店を出る事にした。

会計を済ませる時にまた、あの店員さんだったので、軽く自己紹介と挨拶をしてから俺は店を出た。

第2話『転生するイレギュラー』（後書き）

第2話いかがでしたか？

アニメの世界に転生したと舞い上がる龍斗と、すぐさま今はこじが現実だと思おう光貴。

光貴が子供にならなかったのは、光貴がイレギュラーであり、神が子供にいなかったからです。

龍斗は光貴が居なかったら、すぐさま原作キャラの家に行って他の転生者と出会うことになっていたでしょう。

それでは、次回もよろしくお願いします！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2837n/>

魔法少女リリカルなのは～イレギュラーな転生者～

2010年10月15日23時05分発行